かつて私は九州から東京へ飛ぶ機上から、多くの島々をちりばめた瀬戸内海が陽光にきらめくのを見て、楽園のように感じたことがある。その静かで優しい内海は、いにしえの歴史とロマンを包み込んで悠久の静けさをたたえているかのようであった。

○ ○ ○

瀬戸内海はよくヨーロッパの地中海にたとえられる。その昔、内海の島々をわが物顔に支配した水軍も、オデュッセイアに出てくるギリシャの物語も、共通していにしえのロマンを感じさせる。エーゲ海に開花したギリシャ文明がヨーロッパ文明の揺りかごなら、大陸と飛鳥(奈良県)を結び、歴史と文化の大動脈役を担った瀬戸内海は日本人の故郷と言っていいだろう。

今を読む

経営コンサルタント
岡村有人

おかむら・くにと 1947年広島市生まれ。2003年音響機器メーカー・ボーズの副社長を退職後、独立。東京都世田谷区。

ヒロシマに智の象徴を

都市の品格

わずかに豊後水道、紀伊水道そして関門海峡を通じてのみ、外海とつながるこの内海は、文化醸成の母なる海であったに違いない。広島はそんな瀬戸内海の島々を南に望み、奥まった湾のその奥に七つの川とともに形成されたデルタの街である。これらの島々が内海の陽光と交じり合って織り成す風物詩は、多くの広島人の郷土愛の原点と言っても間違いないだろう。

七十年間草木も育たないといわれた広島の街は大きく変わった。原爆投下直後、くまなく見渡せる広島の焼け野原に幾晩も青白く燃え続けた荼毘(だび)の火は、まさに地獄絵であったが、今日の広島にはその当時を髣髴(ほうふつ)とさせるものは何もない。

だが一抹の寂しさを感じないでもない。多くの被爆原体験の傷あとが時代の経過とともに風化し、被爆証言者が年々いなくなる中、今後も広島が世界平和のメッセンジャーであり続けるには、単に表向きの景観の美しさだけでなく、街そのものが深い祈りを発する品格ある都市へと発展していくことが重要である。

ヨーロッパの古い街並みを訪ねる時、強く感じるのは歴史に裏打ちされたそれぞれの街固有の香りであり、建物や石畳からわき出る街のオーラである。そんなヨーロッパも、歴史を振り返ると破壊と殺戮(さつりく)の歴史であった。アンチテーゼとしての「真善美」なる物へのあこがれが、これらの街づくりのベースになっているように思えてならない。

長い年月をかけて歴史を刻みながら造られたこれらの街からは、そこに生き、生業を築いた人々の夢と理想のメッセージがひしひしと伝わってくる。多くの場合これらの街には、大学、教会、劇場などがあって、その街の文化を支える象徴として機能している。

○ ○ ○

その意味で広島大学の本体が千田町からなくなってしまったことは実に寂しい。「平和」を合言葉として世界の英知が集まる、その求心力としての「智(ち)」の象徴がヒロシマには欲しいのだ。今も残るれんがタイルの旧理学部1号館は、原爆ドームとともに人間の愚行を戒め、英知の永遠性を訴える世界遺産的モニュメントではあるまいか。

発展と破壊は裏腹である。私が子どものころ比治山の天狗岩から望んだ広島湾の茫洋(ぼうよう)たる眺めは、今では高層ビルに阻まれてその面影を留めない。宮島の対岸に高さを競うマンション群は、宮島の神聖なる美しさに影を落としているかのようである。質素でよい。人が喧騒(けんそう)から遮断されて謙虚にかつ真に生を実感できる空間が欲しい。そんな空間が広島の街にあふれるようになった時初めて、広島のメッセージはおのずと世界に届くようになるであろう。

それは一世代や数世代の間にできるものではない。ゆっくり時間をかけて後の世代に受け継いでいく息の長いプロジェクトだ。それはまさに祈りのプロセスなのである。